
GONTZ -ゴンツ-

サトゥ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

G O N T Z - ゴンツ -

【Nコード】

N 2 2 2 4 D

【作者名】

サトウ

【あらすじ】

小説、海外ドラマとパクらせて頂きました、パクリ小説シリーズ第3弾は漫画「G A N T Z ゴンツ」です。

第1話「クラリティ・クオリティ」（前書き）

一応3部作つつうわけで。「野ザル」をプロデュース」「トオル・コーリング」をみてから読んでいただければ幸いです。

第1話「クラリティ・クオリティ」

俺の名前は素野計。しろのけい 16才。風鈴具流須高校の1年だ。ふうりんぐすここう

わけあって両親と離れて暮らしている。家賃4万7000円のボロアパートから学校に通う日々。平凡な高校生。悩みもそれなりにある。

目下の悩みは2つ。ひとつめは隣の部屋の騒音。1週間に1回ぐらい夜中の12時にいきなり人の話し声。叫び声に近い声や、なにやら大きな物音も聞こえる。その後静かになり、また朝方3時4時に部屋を大人数が出て行く気配。これで目が覚めることがある。

不思議なのは部屋に入る気配が全くしないことだ。いつも10人ぐらい部屋から出て行く感じなのに、12時には人が入っていく気配はない。いきなり部屋で声が聞こえて「またか」となるのだ。

なにかしらの霊現象か、変な集会か、それともいかがわしいパーティでもやっているのか。耳をすまして会話を聞こうとするが、

「なにこれ」

「なんだよ。これ」

「死んだよね」

と全くわけがわからない。

大家に言う事もできるだろうが。なんかめんどくさい。そう俺は「なんでもめんどくさいという世代」なのだ。

隣りで何が起ころうと関係ない。そんなの関係ねえってのが巷で流っているが。

もうひとつの悩みてのは、「恋」だ。それも片思い。もう相当に一方的な。

相手は同じ高校の3年生「たけしんちらい田所葉理子」。

彼女を初めて見たのは文化祭のイベント「ミス・フウリングルス高校」で優勝したときだった。なんでも彼女は1年のときに3位。2年生で準優勝、そして今年の3年でようやく念願の優勝を果たしたらしい。学校行事には、とんと興味がない俺は誰にも投票しなかったが候補者ポスターを真剣にみていれば迷わず彼女に投票していただろう。もっともその名前は噂には聞いていた。友達が少ない俺でも、クラスの話題にはなんとかついていつてるし、その中に彼女がカワイイという噂もあった。

だが初めてみたときには衝撃を受けた。もう俺のドツボ。今のところ遠くから見つめるだけで十分じゅうぶんなのだが。

そう。今みたいに帰り道に後ろからついていくぐらいで十分なのだ。

えっ。ストーカー？違う違う。たまたま帰り道が一緒なだけだ。

俺がやることは計算して下校時間を合わせるだけだ。

やっぱりストーカーだって？まあ、そう言われてもしょうがない。

しかし、さすがに家まではついていかない。俺のアパートは学校の近くだし。

自分の部屋に入る前にその後ろ姿をそつと見つめながら「さよなら」と、心の中でつぶやくのが日課だ。

おお、純情少年だ。えっキモイって？まあそう言われてもしょうが

ない。か。部屋に入るとドカッと座り、すぐに万年床に横になる。

「なんとかお近づきになれねえかな」

独り言をつぶやく。

「部屋、そろそろ掃除しねえとな。来週オカンが様子見にくるつつてたし」

周りにはゴミが入ったコンビニの袋だらけだ。

「やっぱめんどくせえ」

そう。しつこいようだが俺は「なんでもめんどくさいという世代」なのだ。

「だいたい、なんだよ、その世代は・・・」

自分にツツコミながら、いつのまにか寝てしまったようだ。時計を見ると夜の11時半。ヤバイ。これは隣の騒音とか関係なく、夜中に寝れなくて朝方寝て遅刻。というパターンになりかねない。

しかし、腹は減っていた。近くのコンビニでも行くか。と帰宅したときの制服のままアパートを出た。外は恐ろしく肌寒い。小走りになりながらコンビニへ向かう。コンビニの自動ドアが開いても、一瞬俺は中に入れなかった。

雑誌コーナーで立ち読みをしている女の子に目が釘付けになったのだ。

タドコロハリコがいる。上下スウェットというラフな格好で。

（うわー。やっぱり家、この辺なのかな。スッピンでもカワイイなあ。スウェットとはいえ初めて私服みたよお）

といろいろ思いながら、チラ見しつつ。弁当コーナーへ行く。数も少ないし、あるヤツも食べ飽きたものばかりだが、どうでもよかった。飲み物も適当に選んでレジへ急ぐ。

（なんか話しかけるか。これはチャンスだ。でもなんて？）

お釣りを受け取りながら雑誌コーナーを見る。
もう彼女の姿はなかった。

「ヤベ」

慌てて店を出る。彼女の後姿を見つけた。思いのほか遠くにある。

（あの方向だと、大通りの向こう側に住んでるのかな。オシャレな住宅街があるし）

ここまでくると妄想では収まらない。好奇心が勝つ。

俺は彼女を追いかけた。読者の皆はドンビキしてると思いつつも、だがこれから起こることを考えれば、俺の選択は正しかった。

彼女に追いついたときすでに大通りの横断歩道を渡るところだった。彼女はヘッドフォンで音楽を聴いているようだ。信号は赤。

（おいおい信号無視かよ）

俺はおいかけて渡ろうとした。が、彼女に向かってものスゴイスピードで近づくトラックに気がついた。

「おいおい。マジかよ」

彼女は気がついていない。このままでは……。

（うわー。こういつときほんとにスローモーションだ）

そんなことを思いつつ俺は飛び出した。

「危ない！」

彼女を突き飛ばそうとしたときだった。

ドンという音が聞こえた。彼女と俺にトラックが当たった音だった。

「マジ・・・かよ・・・」

全身が痛かった。何が起ったのか。上をトラックが通り越したのか。気が付けば彼女を抱きかかえるように、俺は倒れていた。

「ひきづられなかったただけマシなのかな・・・」

キキーというブレーキ音と共に車が何かにぶつかる音がした。

数十メートル先の電柱にぶつかってトラックは止まっていた。

意識が遠のく。

「嘘だろ。俺、死ぬのかな」

彼女をみる。意識はないようだ。

「せつかく、こんなに近くにいるのに・・・」

せめて彼女を助けたかった。

俺は目を閉じた。まさに今日、家に帰って寝っ転がったときのように。

目が覚めた。生きていたのか。ここはどこだ。病院じゃねえな。だってまだ目の前に彼女はいる。まだ抱きかかえる感じで。すぐそばに。

床には畳の感触。室内であることは間違いない。

「おい。また出てきたよ」

声が聞こえた。ゆっくり起き上がる。

「あれ。ここ」

見慣れた部屋だった。間取りが自分の部屋と同じだからだ。しかし、自分の部屋とは全然違う。家具はまったくないし。キレイだ。

それに、部屋のと真ん中にバカデカイ、玉があった。そして周りを取り囲むように人間が数人立っていた。

「たま」ってなんだよ。と思われるかもしれないが、まさにその表現しかないのだ。直径2メートルはあるだろうか。光沢を持った真っ白い玉が部屋を占領していたのだ。

「なにこれ？どつきり？」

つぶやくと、20代ぐらいのチャラチャラした男が話かけてきた。

「俺たちもわかんねんだよねえ」

後ろには仲間らしき男が3人いた。他の人間もサラッとみる。

60代ぐらいの男。40代の主婦っぽいおばさん。若いカップル。

スーツ姿の比較的若めのサラリーマン。

そして部屋の隅に突っ立ったままの学ランの少年。中学生か？

幼さの中にもキリつとした眉が大人びた印象を持たせる。見覚えがあったが、思い出せない。

俺たちも含めて12人。か。

「あれ、これウチラが行ってた高校の制服じゃん。フウリングルスでしょ」

「はあ」

「まだ寝てるこの子は彼女？」

「いえ、違いますけど・・・」

「あれ、この子、確か、」

「やっぱり君も死にかけたのかい」
サラリーマンが話しかけてきた。

「えっ死にかけ？」

「そう。ここにいるみんなは死を目前にしてここに集まってるんだ、私は、誤って駅のホームに落ちて、電車が目の前にきて・・・。その若いコ立ちはドライブ中に事故に。おじいさんは病院で・・・。そこのおばさんも車の事故。そういえば君は聞いてなかったな」

中学生に話しかける。

彼はゆっくりと口を開く。

「そんななんでもいいっしょ。ったくロクな人間集めねえな。ゴンツは」

集める？ゴンツ？なんだいったい。俺は窓の外に目を向けた。

「まさか」

俺は急いで窓際に向かった。真ん中の玉の脇をなんとかすりぬけて

「ダメだつて。窓も開かない。玄関も開かないよお」

チャラ男の一人がいう。

俺は確認したいことがあった。隣りのベランダだ。

「マジかよ」

干しっぱなしの洗濯物はあきらかに自分のものだった。

第2話「ブレイン・トレイン」

「マジかよ・・・」

このデカイ「玉」のある部屋は自分の部屋の隣りだった。携帯の時計を見る。

12時。やっぱり。俺は今から、あの騒音の正体の真相を知ることになるのだ。

「わけわかんない。といいつつ、これガンツなんだよなあ」

最初に話かけてきたチャラ男、そうだな。チャラ男1とでもしておくか。が言った。

「だよなあ。お前んちにあるヤツ全部読んでるし」

チャラ男2が言う。

「なに、なにそのガンツって」

「聞いたことあんだけど・・・」

チャラ男3、4が続ける。雰囲気からして、1、2がリーダー格っぽい。

中学生をみる。さっきのチャラ男たちの会話を鼻で笑ってるようだ。

「ん。ん」

タドコロハリコが起きたようだ。

「だ、大丈夫ですか」

おそろおそろ話しかける。

「えっ、ここどこ？」

目を開けて回りを見渡す彼女。

「確か・・・」

「そう。トラックにはねられて・・・俺助けようとしたんですけど」
「ありがとう、助けてくれたの・・・ね」

「いや、助けられなくて・・・俺も一緒に」

「じゃあ、なんでここに・・・どこも痛くないし」

「俺もわかんない」

見守っていた、チャラ男たちが話しかけてきた。

「ねえ、確か、ハリコちゃんじゃねえ？」

チャラ男1。

「は、はい」

「ほら高1のときオンミヨウジとつきあってるって噂あったよね」
チャラ男2。

「覚えてないかあ。俺たち2人オンミヨウジのダチンコでさ。あつ。
こつちの2人は大学の友達。地府星大学チブスタなんだけどさ。東門総一ひがしかどそういちだよ」

「はあ」

「俺は矢作明男やけあきお」

「はい・・・一応。知ってますよ。有名だったし」

「一応とか言われてるぜ。お前ら高校時代し4で有名だったんだろ」

L4・・・俺も聞いたことがある。確か、俺が入学する2年前には存在していた金持ち4人組。まあ、花より男子のパクリだ。とうとう残り2人が出てきたってわけだ。なんで俺がそんなことを知っているのかは・・・どうでもいいことだ。

「うつせえな」

チャラ男1・・・ヒガシカドが言う。

「まあまあいいじゃん。あいかわらずカワイイね。ハリコちゃん」

チャラ男2・・・ヤハギがなだめつつ。タドコロハリコにいやらしく笑いかける。

クソ。馴れ馴れしい。

「それよりこの玉なんだよな」

俺は思い出していた。

「そうえば、ガンツって」

「そうそう。マンガなだけどさ。マンションに黒い玉があって、音楽が流れてくるんだ」

といった瞬間、白い玉から、なにやら音楽が流れてきた。

「これって」

「やつべ。やつぱガンツじゃん。みんなみてみるよ。これから白い玉になんかでてくるって」

いまだ隅にいる中学生を除くみんなが玉の前に集まる。

玉の表面の一部がテレビ画面のように変わって、なにか文字が浮かび始めた。

「YOUたちは死にました。死んだ命をMEが勝手に使ってもいいよね」

これからコイツをやっつけにいったいなよ」

「な、なんだよ」

「だからあ。ほら、また画面変わった」

画面に七三分けのおっさんが出てきた。横に文字。

「トランス星人？本人弱いけど武器が強いよ。口癖『とらんす・ふ
おゝむ』『ギゴガゴギゴ』だってさ」

「うわーやっぱガンツだよ。これから俺たちコイツ倒しにいくんだ」
ヒガシカドが言った。
みんなキョトンとしていた。

「おいおい、それはマンガだろ。俺だってガンツ読んだけれどこ
は現実なんだぜ」
小説だよ。とツツコミたかったが止めておこう。主人公でも言っ
ちやあいけない。

「でも、この状況は明らかにそうだろ！今から、この白い玉の扉が
開いて……」

プシューという音とともに白い玉の扉 - があつたようだ - が開く。
両側から。上に向かって。
いわゆるガルウィングというヤツだ。

「ここは違うんだな」

「デロリアンみてえ」

扉にはいくつも白い金属製のスーツケースがぶらさがっている。

「ほら、このケース。たぶん名前。あだ名で書いてあるヤツもって

けよ」

ヒガシカドがスーツケースを取りはじめた。

俺は玉の中を覗き込む。驚いた。全裸のおっさんがなにやらホースで繋がれて、目を閉じている。

「ねえ、この人」

俺はヒガシカドではなく、中学生に声をかけてみた。直感で彼の方がこの世界に詳しい。と俺は判断していた。

「さあ、知らないや。ま、今から来ればわかる」

「はあ？どこ行くんだよ」

「先行くよ」

彼の頭がなくなっていた。

えっ。上から順番に消えていく。

手には銃みたいなヤツを持っていた。

銃！？な、なんで。ふと扉を見ると中学生のヤツが持ってたものと同じようなものがぶらさがっている。

「おいっやつば転送始まったぞ」

「マジかよ！」

ヒガシカドとヤハギの声。

転送？なんだよ。それ。俺は銃をつかんだ。するともう景色が変わっていた。

外にいる。周りを見渡すと中学生以外はまだいた。

ハリコさんは？ここで急にさん付けになるのはこの際、置いておこう。

彼女は怯えるように、うずくまっていた。

「大丈夫ですか？ハリコさん」

「う、うん。ホントわけわかんない」

カップルも、サラリーマンも主婦もおじいさんも、ボーっとしていた。

「なにこれ」

「なんだよ」

「ここ、目九張めくはりじゃないか？」

メクハリ？隣りの県じゃないか？一瞬でこんなところまで。

俺は目の前に建つドーム状の建物をみつめた。

「これ、メクハリメッセか・・・」

俺はつぶやいた。

「おいお前ら、早く着替えろよ」

「つつかスニーカー持って来たの俺たちだけじゃねえ？」

ヒガシカドとヤハギはスニーカーからなにやら取り出していた。白い全身タイツのような。少しはスタイリッシュだが。間接部分にサポーターのようにプロテクターがついている。

「なんか白だとかっこつかねえな」

「しょうがねえだろ、こっちはこういう設定なんだし。死にたくないだろ」

死？俺たち死んだんじゃ……。2人は周りを気にせず、着替えていた。

ブーブーブーブー。変なブザー音が聞こえてきた。

「なんだよこれ。お前の着メロか？」

「ちげーよ」

声も聞こえた。

その方向を見るといつのまにかチャラ男3と4がメクハリメッセの敷地内から出ようとしていた。

「バツ、バカ、そっち行くな」

ヒガシカドが慌てる。なんでだ。

「えーっ何、聞こえねえ」

ブザー音が次第に大きくなった。

「だっからっ、戻って来い」

「え？とにかく駅の方まで行くよ」

今度はヤハギが何か言おうとしたが、チャラ男3と4の足は完全に敷地外に出ていた。

「ボン」大きな音がした。瞬間2人の頭がふつとんで、体は倒れこんだ。

「キヤア」

「うわ」

皆、次々と叫ぶ。

「くっそお。ガンツと一緒だ」

「こりゃ、マジでやべえな」

2人は着替え終わっている。手には銃を持っていた。

「おい、お前らそこにいろよ。ここにだまっていればたぶん大丈夫だ。0点でもあの部屋に戻る」

0点。なんじゃそら。

「確か、今、東京スーパーカーショーやってんだよな」

「ああー。俺、行きたかったんだよなあ」

「よかったじゃん。来れて」

「おいおい。こんな状況で来てもなあ」

「キャンギャルもないだろうし」

2人はメクハリメッセに向かって歩き始めていた。

俺は何がなにやらわからず立ちすくんでいた。

ハリコさんは横で座りこんで震えていた。

カップルは寄り添って。

サラリーマンも座り込み。

主婦は一言も発していないが、疲れた様子だ。

60代のおじいちゃんは・・・何か考えているようだ。

作者は登場人物出しすぎたか。と少し後悔していた。

第3話「セブン・デイズ・ワンダー」

「マジかよ・・・」

さつきから、こればかり言ってる気もするが、無理もない。
あまりにも異常な状況だ。

死んだと思ったら自分ん家の隣りの部屋にいて、そこから飛ばされて、数メートル先には頭がない死体が2つ。

「ありえねえつつーの」

俺は手に持つてる銃をみつめた。

無我夢中で掴んだようなもんだ。SF映画に出てくるみたいな。トリガーが2つ。後ろにモニター画面。ダイヤルが0〜5。スイッチが何個か。

「なんだこれ。使えんのか」

ふとメクハリメッセの方を見ると、ヒガシカドソウイチとヤハギアキオが入り口から入るところだった。

俺は決心した。

「ハリコさん」

「えっ」

「あんたはここにいてくれ。みんなも」

俺はその場にいる人たちを見渡した。

あの中学生はいない。こうなると、あの2人を追いかけなければ状況は掴めない。

あの変なスーツはないが武器らしきものがある。

それを使えるか。使う相手がいるのかもわからないが。

「あの」

ハリコさんが話しかけた。止めてくれるのかい。そばにいて欲しいのかい？

「なんで私の名前知ってるんですか？」

思わずガクツとなりそうだったが、それではコントになるのでなんとか自分を抑えた。

「そりゃあ、今年度のミス・フウリングルスの女の子の名前を知らないわけじゃないじゃん」

「あっ」

ハリコさんは俺のヨレヨレになったブレザーを見つめた。

「カワイイ」

思わず声が出そうになったが、これまた自分を抑えた。

「んじゃ、ここにいて」

俺は走り出していた。

入り口までくると、俺は扉を見上げた。

「中央ホール入り口」とある。

ガラス張りの部分から中の様子を伺う。

警備員はいない。すんなり扉は開けることができた。

こんな手薄でいいのか。

その奥にもうひとつ扉があり、そこからホールへ行けるようだ。意味もなく銃を顔の横に構える。

2つ目の扉を開けた瞬間、ものすごい勢いで体を壁にたたきつけられる。

押さえ込まれて銃口が頭に押し付けられるのを感じた。が、すぐに離された。

「なんだおまえか」

ヤハギだった。

「おいおい。あそこにいろつつつたろ」

物陰からヒガシカドが出てきた。

「いや、なんか俺も手伝えるかなと思って」

俺は銃を見せた。

「無理だつて、お前スーツないじゃん」

ヒガシカドはあたりの様子を伺いながら言った。

「だから、そのスーツとか、ガンツとかわけわかんないんすよ」

「まあ、俺たちの今の状況は漫画ガンツに似てるってわけだ」

「銃がちよつと違うんだよなあ。俺たちにもぶっちゃけ使い方がわかんねえ」

「それに、あんたら・・・」

「ん。なんだ？」

「友達が死んだつてのに平気そうだった」

「それはまあ、そこまで仲良かったわけじゃないし・・・いざとなつたら」

「？」

「100点取つたら生き返らせられるかも」

ヤハギが言った。

「まあ、100点取っても、あんなヤツら生き返らせないけどな」

「うわ。お前ひでえ」

「それにそこまでガンツと一緒にとは限らねえだろ」

「あの100点とかさつきも0点って・・・」

「ああ、今から俺らはおそらく星人と呼ばれるやつらを倒さなきゃいけない。あの玉ところに映ってたヤツいただろ。七三のおっさん」

「え、ええ」

「あいつがこの中にいるはずなんだ」

ヒガシカドは手元を見ていた。携帯電話ぐらいの大きさでスーツに収納されていたようだった。ヒガシカドはそれを俺の方に向けた。

「ほらここの地図。赤い線で囲まれてるだろ。これがこのゲームのエリアだ。こっから出るとアイツらみたいになる。でこれでズームと。今中央ホール。西ホールに反応があるみたいだ。でこれから俺たちはここに向かおうと思ってたわけ」

「そんで倒したら点数もらえるわけ。それが100点になるとヤハギが続けた。

「なると？」

「俺たちはこのゲームから抜け出せるってわけだ」

「本当すか？」

「これはガンツじゃないし。この作品の作者がそこまでパクってくれているといいんだが」

おいおい。そういうセリフは主人公だけに言わせてくれ。

「とりあえず、進もう。中央ホールから西ホールに行けるはずだ。ついてこいよ」

ヒガシカドが促した。

メッセ内に完全に入ると、そこはさっき2人が話していたように、東京スーパーカーショーが開催されていた。といっても真夜中なので誰もいない、格扉の上の非常灯の明かりでぼんやり、車がたくさん並んでいるのがわかる。

「暗闇に目が慣れなきゃな」

「これたぶんライト機能あるぜ」

「いや、ここは目立たない方がいい」

俺と2人は中央ホールの真ん中あたりまで辿りついた。

「うわっここノッサンのブースじゃん。これJT-Rじゃね」

「やっぱり、かつこいいな」

こんなときになんて会話してんだ。と思いつつも。俺もノッサンというメーカーが出したJT-Rの最新モデルの美しいフォルムに見とれた。暗い中で浮かびあがる銀色のボディはなかなかのものだ。

「よし、暗闇にも慣れた」

俺は慌ててヒガシカドをみた。

「おまえはここにいろ、JT-Rの前」

「えっ」

「だからスーツないからとりあえずここだ。俺たちはレーダーが反応してる西ホールに向かう」

「ちょ、ちょっと待ってよ」

「いいから、これ取り外せるよな。ほらこれ、渡しておくよ。なんかあったらすぐ逃げろよ」

ヒガシカドは俺に先ほどの機械を渡した。チャラ男だと思っていた方がいいヤツなのかも知れない。

「いいか。この赤い点がたぶん星人。でここに青い点が3つあるだろ。これが俺たち、星人の方はわかんないけど、頭に埋め込まれた爆弾に反応してんだろ」

そうだ。自分の頭も爆発する可能性があるということとはそういうことだ。

「んじゃ。行くぞヤハギ」

「ヘイヘイ」

「俺たちが10分たつて戻ってこなかったらとりあえず外に出ろ」

「おい。お前カッコつけすぎ」

「バカ、何言つてんだ。行くぞ」

「ヘイヘイ」

2人はまた暗闇へと消えていった。西ホールに向かって。なかなかカッコいいじゃないすか。

チキンなオイラはここで待ちますよ。と。レーダーをみつめる。異常はない。が、青い点2つは確実に赤い点に近づいている。

携帯を取り出して時計をみる。相変わらず圏外だ。

「10分か。意外と長いな」

バチバチ。電気が流れるような奇妙な音。

振り向くと例の中学生が立っていた。

「な・・・」

レーダーを見るそこには赤い点に向かう青い点がふたつ。そして自分のいる位置にも点が2つあるではないか。

「お前、いつのまに」

「消えてたんだよ。これに参加するときは、たいてい消えてから点数稼いだ方がいいからな。もっとも最近じゃ、姿を消しても見えてるつつう星人も出てきてる」

「どうやって？」

「これだよ」

彼は自分のレーダー部分のあるボタンを押した。バチバチっという音とともに彼はまた姿を消してみせた。

「おまえと話がしたかったんだ」

バチバチと音がなり、彼は姿を現した。

「このレーダーはスーツの機能も制御できるってわけだ。もっともそうやって取り外すとレーダーしか使い道ねえけどな」

「そういうのは後でいいよ。とにかくこの状況を説明してくれ」

「あの2人がほとんど説明してくれたろ。基本、ガンツと一緒にだよ」

「死んだ人間が集められて星人退治をするってか」

「その通り」

「ありえねえつつうの」

「まあ、俺も最初そう思ったさ。でもこれが現実」

「そういえば、お前はゴンツって言ってな」

「ああ、昔これに参加してたヤツが名づけたんだよ。ソイツもガンツを知ってたからな。俺は……。最初のゲームに参加した後には読んだよ」

「これは何回目なんだ」

「3、いや4回目かな。1週間前に秋葉原であつた大型家電量販店の爆破事件覚えてるか？」

「ああ、ガス爆発とかテロとか言われてたヤツな」

「アレも俺たちだ」

「マジかよ」

「相手はメイド星人。なかなか手強かったが、なんとか倒した」

「でも、どうして、お前しかないんだ？ 今日集められたメンバーはお前以外は初めてって感じだったけど」

「全滅した」

「えっ？」

「最後まで生き残っていたのは俺も含め4人だった。でも転送されてきたのは俺ひとりだったんだよ。何が起こったのかわからない。ただ言えるのは、セカンドインパクトが近づいているってことだ」

それなんてエヴァンゲリオン？ とつつこみそうになったが止めた。

「なんだ、それ？」

「詳しいことはわからない。が、ファーストインパクトは9・11同時多発テロらしい」

「おいおい、あれもなんとか星人のせいだっていうのか？」

「だから詳しくは知らねえって。全部前のメンバーからの受け売りだよ。ソイツらも死んだし、とにかく2000年以降の世界各国で起こっている凶悪事件や未解決事件はゴンツが絡んでるって話だ」

「ここから抜け出すには？ やっぱ100点とればいいのか？」

「ああ、しかしガンツにはない特別メニューがある……。ちよっと待て、おいリーダーみろ」

俺はレーダーを見た。赤い点と青い点が並んで近づいてくる。

「おい、どうなってんだ」

「知るかよ。アイツらが死のうがどうなるうが俺には関係ない」

「だったら、なんで俺の前に現れたんだよ」

「やっぱり覚えてないか。ケイちゃん」

「な、なんで俺の名前知ってたよ」

3つの点はどんどん近づいていた。

第4話「バースデイ・プレゼント」

「ヨウちゃんか？」

俺は思い出していた。やはり彼は中学生だった。俺の記憶では彼はひとつ年下だったから。

「ああ。そうだよ。ひさしぶりだな。こっちに戻ってきていたんだな」

彼の名は南洋司みなみよしじで小学生のとき家が近所でよく遊んでいたのだった。俺は小5で転校してしまい、それ以降連絡は取っていなかった。

「そうなんだよ。こっちの高校に通っている。親はまだ向こうにいるんだけどさ。ほんとひさしぶりだよな。カワイイお姉さんは元気かい？えつとヨウコちゃんだったけ」

「まあ、元気にしてるよ。ケイちゃんの高校のミスに選ばれたり。そんなにカワイイか？って思っけどな」

「え。そうなん？」

俺の3つ上だったヨウジのお姉さんは当時中学生でおそろしくかわいかった記憶がある。

もしかしたら、俺の初恋だったかもしれない。

「なんで最初から言ってくんなかったんだよ」

「まあ、ゴンツでは死ぬか生きるかの世界だし。クールキャラでないかないと、やってけないところもある。実際、前のメンバー間でも馴

れ合いはなかった。協力プレイはしてたけどな」

「じゃあ、俺たちは協力していこうぜ。とにかく今やるべきことはあの画面のおっさんを倒さなきゃいけないんだろ」

「まあな。協力するつてのは考えておくよ」

「なんだよ。その冷たさ」

「こっちは戦いの中で、人間の汚さつてヤツをイヤというほどみせつけられたから・・・おっともうすぐ近づいてくるハズだぜ」

俺は返す言葉も思い浮かばず、ヒガシカドとヤハギが来るであろう方向を見つめた。

人影が近づくのがわかった。3つ。

「おい。まだいるかぁ。そういやまだ名前聞いてなかったなあ。

おい」

「いるよー。名前はシロノだよー」

ようやく姿をしつかり確認できた。

「アイツだ・・・」

例の部屋の玉の画面でみたおっさんがゆっくり歩いていて、それを挟んで二人がついてくる感じでこちらに向かってくる。銃口はおっさんに向けているようだった。

おっさんは異常に背が低く140センチぐらいしかない。しかも格好がチェックのジャケット、半ズボンでまるで小学生だ。

「おい。どうすりゃいいんだよ。みつけたはいいいんだけどさあ。こっやっていきなり動き出すし。銃で撃っちゃってもいいのかねえ。

つつか使い方わかんねえしさあ。あつ、お前、どこにいたんだ？」

ヒガシカドもこちらの様子に気がついたようだ。といってもその距離はもうかなり近い。

そして止まった。

「コイツ知り合いだったんすよ。この世界にも詳しいみたいで」

「余計なこと言うなよ」

「えっ」

「俺は消えるぜ」

「ちよつと待てよ、ヨウちゃん」

「じゃあな。まあ、銃の使い方は教えておいてやるよ。ダイヤルは1にしておけ。モニターを覗いて、ひとつトリガーをひけばロックオンされる。あとは両方ひけば攻撃できるよ」

「なあ、助けてくれよ」

「助ける？まだ危機的状況じゃあ、ないだろ」

「おい！」

バチバチという音と共にヨウジは消えた。

「消えたか。なんなんだよアイツは？」

ヤハギは銃をおっさんに向けたまま聞いた。

「何回かこういう状況で戦ってるみたいですよ」

俺は近づいていった。

「おい、気をつけるよスーツないんだから」

「そう、そのスーツで消えられるみたいです」

「さっき試したよ。俺はできなかったけどさ」

ヒガシカドが言った。

「すみません。コレ返します」

俺はリーダーを返した。ヒガシカドはそれを袖にあるコードに繋いだ。

「さあてどうするか」

「銃の使い方聞きました。ダイヤルを1にしろって」

「聞こえてたよ。ほぼガンツと一緒にだ」

「そ、そうすか。で。撃つんすか」

「どうするかなあ」

「で、でもコイツ変だけどやっぱり人間じゃないんすかね。どうみても、その宇宙人には・・・」

「宇宙人かどうかはわからないか人間じゃないのは確かだ」
ヤハギが言った。

「え？」

「お前も銃持つてだろ。モニターで覗いてみる」

俺はおっさんに銃を向けた。結果3人で囲んだ形となった。

「これって・・・」

モニターにはおっさんの内部らしき映像が映し出されていた。そこには骨や臓器の姿はなく、明らかに機械的なもの・・・携帯電話の内部構造のように、こまごまとした部品、チップが見えた。

「ロボットすか？」

「まあな」

「もう撃つしかねえべ。なあ、少年？」

ヒガシカドが言った。

少年？

「おい。バカにしてんのか？お前らの勝手にしろよ。今回はお前らに点数をくれてやる」

ほんの数メートル先で、ヨウジの声がした。

「ヘイヘイ」

ヤハギが答える。

「やっぱりすぐそばで見てやがったか」

「どうするんすか」

「もう撃つまおうぜ」

「早くロックオンしろよ」

「お前がやれよ」

「ギ・ギギ・ゴ・ゴ・ガ・ゴ」

突然、おっさんがしゃべり始めた。

「コノ・ワルモノメ・タイジシテクレル」

「な、なんだ」

ポケットに手を入れる、おっさん。

途端にギュインギュインと、なにかエネルギーが溜まるような音がした。

「なんだなんだ」

「まさか」

パン。少し乾いた音がして、おっさんの頭がはじけた。倒れこむおっさん。

「おい、お前いつの間に！」

「お、俺じゃねえよ。お前だろ」

「違う」

2人が一斉にこちらを見た。

「いやいや俺なわけないっす」

「俺だよ俺」

ヨウジの声が聞こえた。

「なんだよ。点数くれんじゃなかったのか」
ヒガシカドが口を尖らせた。

「あんまりモタモタしてっからさ。ややこしくならないうちに」

「おいおい。なんか、おかげでややこしいことになりそうだぞ。少年」

ヒガシカドはおっさんを見下ろして言った。

倒れこんだおっさんは何やらコントローラーのようなものを持っている。

ひとつだけあるスイッチが押されていた。

そしておっさんの頭は吹っとんでいたものの、口は残っていた。

その口がパクパクしている。そして言った。

「と、とらんす・ふぉゝむ」

「おい、あれみるよ！」

ヤハギが指差した。

振り返ると、ノッサンJ・T・Rのヘッドライトが光った。

瞬間、大きな音をたててJ・T・Rは巨大ロボに変形していた。

「マジかよ・・・」

やっぱりこればっかりだ。

「全然ややこしくないぜ。アイツを倒せばもっと点数は増える」

ヨウジが言った。瞬間。

巨大ロボットの右足が大きく前に出てヒガシカドを蹴り上げた。

「ぐはぁ」

数メートル先の自動車にたたきつけられる。

「大丈夫すかぁ」

俺は叫んだ。ガチャンガチャン。大きな音を立てながらロボットはヤハギに近づいた。

「巨大ロボ誕生ってわけね」

ヤハギは皮肉を込めて言った。こういう状況で言えるとは。あんたはハリウッド映画の主演か。

「くっそお」

ヒガシカドが起き上がる。スーツのおかげで助かったようだ。マジでスゴいな。あれは。

「油断したぜえ。いきますか、博士」

「助手よ。アイツらを壊すことができるのは私たちだけだ」

だからこれはハリウッド映画かつつの。

ヤハギに向かっていったロボットは方向転換をして、ちょうど俺の真正面にきた。

銃を構えていたヤハギは肩透かしをくらって戸惑っていたがすぐに俺の方をみて言った。

「おまえ、スーツ着てねえんだから！早く逃げろ！」

そついうことだ。自分があのケリをくらったら確実に死ぬ。ついさつきぶつかったハズのトラックを思い出していた。早く逃げたかったが体が動かない。

「シヨ……シヨタロサン……コワシ……タ……ダレ……」

「

「おいおい。しゃべったよ」

「どうする」

「とりあえず撃つべ」

「早く逃げろ！」

いろんな声が聞こえてきたが。もうロボットの足は目前。大きく右足がまた蹴り出された。

俺は思わず身を伏せたが足は全く見当違いの方向を蹴っていた。

蹴った先でバチバチと音が鳴った。数メートル先の車のフロントガラスが割れたのと同時に、ヨウジが姿を現した。

「ヨウちゃん、助けてくれたのか？」

「見ててわかつたろ、ヤツは確実に俺を狙ってた。クッソ。やつば見えてるな」

「おい。少年。これでもう協力せざるを得ないだろ」
ヒガシカドが言った。

「しょうがねえなあ。プランBだ」
おいおいヨウジまでハリウッド映画コントに乗っかるか。

「で。どうすんだよ」
「とりあえず、俺とあんたたちスーツ組は接近戦で足を狙え。ケイちゃんは早く離れて」

パン、パン。音がした。ロボットの足が碎ける。が、まだ立てるし、動けるようだ。

「とつくに足は狙ってるぜ。少年。さあ、どうする?」

ヤハギが得意そうに言った。ロボットは振り返り、ヒガシカドとヤハギの方へ向かい始めた。

「あんたたちなかなかやるな。ケイちゃん! 離れて・・・銃のダイヤルを2にしてくれ! そしたら、遠くからでも狙える」

「わ、わかった。足でいいんだな」

「違う」

「えっ」

「足が狙えるならそれでもいいけど動きが早過ぎる。遠くからならたぶん上半身の方がロックしやすい」

「そ、そうか」

俺は走り出した。いつの間にか自分も戦闘に加わっている。

やるしかないのか。俺。

第5話「ザ・ゴースト」

俺は数十メートル走った。振り返るとロボットは暴れまくっているが、3人はチヨコマカと動き回り、翻弄している。

例の「パン」という音で足の装甲が壊れた。向こうでも確実に攻撃してくれているようだ。

俺は銃を向けてモニターをみた。だめだ。何も映らない。距離が遠すぎるのか。

「そっぴや、ダイヤルを2つていつてたな」

俺は横にあるダイヤルを回して矢印を2に合わせる。

ガシャンガシャンと音がして銃身が伸びて、銃が変形した。

「こつちもトランス・フォームつてわけね」

なにやらスコープのようなものが出ていたので俺はライフルのように構えて覗いてみた。

「わお」

見えた。

「これで狙えるってわけね」

言われた通り上半身を狙おうとするがそれでも動きが早い。しかし

ながら的がデカイのでなんとかロックオンできた。あとはトリガーを2つ引くだけだ。ギュイーン、ギュイーンと音がした。

数秒後。パンと音がしてロボットの胸部分、車で言うところのフロントガラスが割れた。

さっきと一緒に、弾もレーザーも出ないが、ロックオンしてトリガーをひけば攻撃ができるらしい。いったいどんな構造なんだ？

しかし駄目だ。あんなところをチョコマカと撃つていても倒せない。

「頭か……」

3人も距離を置き始めた。さすがに限界らしい。足はかなり攻撃されており機械部分がむき出しになっていた。

「ケイちゃん、どんどん攻撃してくれ、こっちはもう少しだ。なかなか倒れないけど……しゃあない。ダイヤルを3に合わせてみてくれ！」

肩で息をしだした2人に呼びかける。

「おいおい。こっちは攻撃よけながらなんだからよお。ケイちゃん、頼むよ」

ヤハギが叫んだ。あんたはケイちゃんって呼ばなくていいよ……。

「わかってますよお」

といいつつも俺はまだフロントガラスを少し割っただけだ。1発目以降なかなかロックオンできない。いやロックオンしても見当違いの場所でロボットの向こう側の壁や車を壊していた。

3人の銃が変形していた。銃身が短く図太くなっている。

「いいかあ。このモードは威力が上がるが、連射ができない。一度撃つと5分は撃てない」

「マジかよ」

「確実に、ロックオンしろよ。一度でおそらく足はふつとばせるはずだ」

「最初からコレにときゃよかっただろ！」

「反動がスゴいんだよ！ロックオンしたら距離を置いてトリガーだ」

「少年よ！年下だろ！さっきから思ってたけど、タメグチはよくねえなあ」

「今、そういう状況じゃねえだろ！あんたらも俺をさっきから少年、少年って。早くロックオンしろよ！」

「もうとつくにしてるっつーの」

「おーれも」

「早く言えよ。距離置くぞ！」

「わあつたよ」

3人が散り散りに3つに分かれた。

「マ・・・テ・・・オマ・・・オマエラ・・・タオス」

ロボットはガシャン、ガシャンとヒガシカドを追いかけ始めた。

「くっそ。トリガー引くぞお」

「とつくにひいてるぞ」

他の2人が叫ぶ。

「今度は俺が置いてけぼりかあよお」

ギューーン、ギューーンと銃が唸り始めた。

ヒガシカドは思いつき走り走っていた。追いつこうとするロボット。手が伸びて、ヒガシカドを掴もうとした瞬間。

「ボン」今までより確実に大きな音がした。

まわりにあった車も吹っ飛び、ヤハギと、ヨウジは吹き飛ばされていた。

ロボットの足が両方吹っ飛んだ。ガシャーン。大きな音を立ててロボットは崩れ落ちた。

ヒガシカドは……すでにロボットの手に体ごとつかまれた後だった。

「やっべ。おい」

「ニギ……ニギ……リ……ツブ……シテヤル」

「おい。どうすんだよ」

ヤハギが叫んだ。

「しゃあねえなあ」

ヨウジが動こうとしたとき、ロボットの頭が吹っ飛んだ。途端にロボットは動かなくなる。

「た、助かったのか」

「スーツ着てるならなんとか抜けられるだろ」

「大丈夫すか」

俺は駆け寄った。

「おまえかよ」

ヒガシカドは力を入れてロボットの手から抜け出そうとしていた。

「ええ。なんとか頭をロックオンできまいした」

俺はロボットの両足が吹っ飛んだ瞬間、動きが止まったのを見逃さなかった。

「これで終わりかな？」

これまた近づいてきた矢作がヨウジに訊ねる。

「まだ、転送が始まらない。それに・・・」

「それに？」ようやく手から抜け出したヒガシカドが今度は言った。

「俺の経験上、星人がロボットなのはあり得ない。あれはダミーなはずだ。本体はどこかにいる」

「マジかよ・・・めんどくせえな」

「とにかく倒しやいいんだな」

「ああ、でも、あのおっさんを倒しても油断するなよ。前回メイド星人を倒した瞬間、明らかに星人のヲタクどもがわんさか出てきたんだから」

「どっちにしろ、あれがラスボスじゃねえのかよ」

「ヤハギは倒れているロボット・・・もとはJ・T・Rだったのだが・・・をみつめた。」

「でもここは変形しそうな車がたくさんあるぜ」
ヒガシカドが冷静に言った。

「おいおい。この車が全部変形するってか？」
「まさか」

「おい」

中央ホール入り口から声がした。サラリーマンとおじいちゃん、そしてハリコさんの3人が走ってきた。かなり焦っているようだ。

「なんだなんだ。あそこにいろつつたろ」

駆け寄る3人にヤハギが声をかける。

「そ、それが、なんだこれ」

サラリーマンは傍らに倒れいてるロボットの残骸をみつめた。

「俺たちが倒したんだぜ。すげえだろ」

「どうしたんだ、いったい」

ヨウジが会話を続けさせた。

「それが急に・・・ゾンビが・・・」

「ゾンビ？」

「最初は一般人だと思ったんだよ。でもみかけた人たちは僕たちに気がつかないし」

「まあ、そういうもんだよ、でも、秋葉原では・・・まあいい。それで？」

「ゆっくり近づいてきて、あの、おばさんに噛み付いて・・・。どんどんゾンビが集まってきててあのカップルもいきなりやられて・・・。ようやく逃げてきたんだ」

「ソイツらは雑魚キャラなのか？」
俺はヨウジに聞いた。

「たぶん違う。前回の秋葉原にも現れた謎キャラだよ。俺は見えないが、転送が始まる直前、他のメンバーが遭遇したらしい」

「見えなかったって・・・」

「通信で聞いてたんだ。最後にゾンビが来た。って言うてた」

「通信？」

「ほらこのレーダーだよ。これには通信機能もついている。ん？」
レーダーを見つめたヨウジが何かに気が付いた。

「これ見てくれ」

「ん？」

「東ホールに反応がある。ほら赤い点」

「ほんとだ。さっきまでなかったぞ」

「おそらく、これは星人というよりロボットに反応しているんだろ。さつきJ・T・Rがロボットに変形した後も赤く反応してたのを覚えている」

「てっことは。まだロボットが？」

「その近くに本体がいる可能性もあるな」

俺はある予感がしていた。なぜそんな予感がしたのかはわからない。だがどうしても確かめてみたくなった。近くのブースに行って東京スパーカーショーのパンフレットを見た。

やっぱり。

「あん？どうしたんだ。ケイちゃん」
ヒガシカドが言った。

「いや、シロノって呼んでくださいよ」

「わりい。でシロノ。どうしたんだ？」

「これみてください」

俺は東ホールの展示物がなにかをみせた。

「なんだよ。これがどうかしたのか」

「いいすか、東ホールは商用車展示ってなってます。ってことはトラックとかなんやら置いてあるんすよ。J T - Rはトランス・フォームって確かにいいました」

「おい、まさか」

「ってことはああいう展開か？ヤツは味方じゃないのか？」

ヤハギも加わった。

ヨウジも察したようだ。

「コンボイ……」

4人が同時に呟いた。サラリーマンはキョトンとしている。

おいおい。あんたはガッツリその世代だろ。

すさまじいエンジン音が聞こえてきた。レーダーを見るまでもなくこちらに近づいている。

「とにかく別れて逃げよう。俺たちがなんとかするから！ケイちゃんは今3人を連れてとにかく逃げるんだ」

「おいおい。俺たちってやっぱり俺たち2人のこと？」

ヤハギが迷惑そうに言った。

「当たり前だろ！あんたたちはなかなか戦いのセンスがある。頼りにしてるよ」

「だったら考えがある」

ヤハギは中央ホールのもうひとつの出口へ駆け出した。

「と、とにかく逃げないと」

俺はサラリーマンと、おじいちゃん、そして愛しのハリコさんをつめた。

必ず守る。

と心で呟く。

「だ、大丈夫かな。あのコ外へ出たみたいだ。まだゾンビがいるかもしれない・・・」

「とにかく西ホールへ向かおう」

「君は戦えるのかい？」

サラリーマン俺の銃を見つめた。

「なんとかね。でもあの白いヤツ着てないからあんまり・・・」

「いや、僕にも考えがある。とにかく西ホールへ向かおう」

さっき俺が言ったじゃん。

「い、いったい何と戦うつもりなんだ」

おじいさんがようやく口を開いた。

「あそこにあるだろ、もう1台巨大ロボットが出てくる」

エンジン音はもうすぐそこだ。

中央ホールに「変形前」の赤いトレーラーが突っ込んできた。

「はやくケイちゃん！」

ヨウジとヒガシカドが銃を構えていた。

「了解！」俺は走り出していた、サラリーマン、「おじいちゃん、ハリコさんの後を追った。向かうは西ホール。」

「とらんす・ふぉゝむ」

声がした。

振り返ると赤いトレーラーは「例の」ロボットに変形していた。

「あれ、みたことある。最近、映画で」

ハリコさんが振り返りながら言った。

「とにかく！走って！」

やっと口を開いたヒロインに俺はそう言うしかなかった。

第6話「バーサーカー」

「勝算はあるんでしょう？」

走りながら俺はサラリーマンに声をかけた。

「勝算というか……。とにかくメカに対抗するのはメカ。でしょ」
「メカって」

サラリーマンはあるブースで立ち止まった。

「メツオカ」と書いてある。

真ん中にはさきほどのJ・T・Rよりも流線型で黒光りしているスポーツカーがあった。

「なにこれ。かっちょいい」

「わが社自慢のコンセプトカー『カマイタチ』だよ」

「わが社って」

「そう。僕はメツオカ自動車に勤務しているんだ。コイツならあのロボに対抗できる。いや対抗してみせる」

「動くの？」

「ああ、まかせておいてくれ、俺はコンピューター制御部門なんだけど、コイツにはスゴイコンピューターが組み込まれているんだよ。とりあえず。開けなきゃな」

サラリーマンはドアについているプレートに人差し指を置いた。
ガチャン。ロックが解除された。

「よかった。まだ俺のは登録されていたみたいだな」

どうやら指紋認識システムらしい。

「さあ、助手席に乗って」
俺を促す。

「あの、俺はいいんですけど、彼女たちは・・・」
言いながら俺は振り返った。

まだ肩で息をしているおじいちゃんにハリコさんが寄り添っている。

「あ、適当に隠れてて」
おいおい。ずいぶん冷たいな。

「大丈夫。こつちにはこないから。つつかさせねえから」
俺はきわめて普通を心がけて言った。

「気をつけて・・・」
はい。がんばります。

俺は助手席に向かった。

すでにサラリーマンは運転席に座り、なにやらハンドルの横のモニターのタッチパネルを押していた。

「カーナビすか」

「なに呑気なことやってんだよ。よし。これで起動だ」
ブーンという音とともに車内の様々なところが点灯した。車というより飛行機のコックピットのようなだった。

「おはよう。マイケル。調子はどうだい」
突然、声がした。エアコンの送風口だと思っていたところはどうや

らスピーカーのようだった。

「絶好調。これから、過酷なドライブになりそうだけどな」

「望むところです」車が、答えた。

「なな、なんすか」

「どうだい。まだかなりの実験段階だから公表してないけど、この車はいわゆるAI搭載なんだ」

「マイケルって・・・」

「知らねえ？ナイトライダー。行くぞキット」

「はい、マイケル」

車は走り出した。

「とにかくこの車で突っ込む。君は銃でどこでもいいから狙うんだ」

「それが作戦すか？なんておおざっぱな」

「コイツの機動力があれば、白兵戦よりマシなはずだ」

車はまっすぐ中央ホールへ向かう。

ヒガシカドとヨウジが「コンボイ」の周りでチョコマカと悪戦苦闘していた。

「キット、アイツの足元に突っ込むぞ」

「なんですか？アレは」

「俺にもわからないが・・・お前ならやれるハズだ」

「あんな姿にはなれませんが・・・なんとか」

俺はその会話をほぼキョトンとして聞いていた。

「ほら、はやく」

サラリーマンに促され、俺は銃を構えた。

「キット、オープンカーモードだ」

「了解しました」

ウィーンという音とともに車の屋根が開いた。

「ね、これ、サンルーフとかないの？無防備過ぎじゃね？」

「こつちのほうを狙い安いだろ！」

ハイハイ。俺は銃のダイヤルを3に合わせた。

「いつちよいきますか」

ヒガシカドとヨウジはこちらに気がついていて。コンボイは動きを止めこちらを見据えている。

カマイタチはまっすぐ足元へと滑り込む。車は通り過ぎた。サラリ
ーマンは絶妙なドライビングテクで思いっきりUターンをした。

「どうだ？」

「なんとかロックオンしましたけど」

ボン。という大きな音がして、コンボイの右手が破裂した。

「やったぞ」

いや、頭狙ったんすけど・・・。

「さあ、反撃開始だ」

「ケイちゃん。なかなかやるな。細かいダメージは与えておいたから、もうすぐだぞ」

いつのまにかヒガシカドとヨウジが車の側まできていた。

コンボイがガツガツこちらに向かってくる。

「危ない！」サラリーマンが叫んだ。

コンボイは左手を伸ばした。俺たちが乗っている車がかまれる。
激しい揺れに俺とサラリーマンは車から落ちた。

「キツッ」

サラリーマンは叫んだが、すぐに自分の身の危険を感じたか、走り出した。

俺は銃を構えて左手を狙う。が、モニターにはなにも映らない。

「ケイちゃん！逃げろ、ダイヤル3を使っただろ！」

そうだった。5分は銃を使えないんだっけ。

エンジン音がした。音の方を見ると、バイクがこちらに向かってくる。

ヤハギだ。後ろにはヒガシカドが乗っている。銃を2つかまえている。

「いつのまに！」俺はとにかくその場を離れた。

「いくぞー」

コンボイが振り返った。瞬間頭が破裂した。次に左手。カマイタチはそのまま落ちる。

走るバイクから二人が飛び降りた。そのままバイクはコンボイの足もとにつっこむ。

ガシャーン。大きな音を立てて、コンボイは倒れこんだ。

「やったぜ」

ヒガシカドとヤハギが喜んでいる。俺は駆け寄った。

「いつの間に・・・」

「ああ、俺も驚いたよ。コイツがバイクでやってきたときには」

「敷地内に停めてあったんだよ。ショー用のやつは動かない可能性があるからな。エンジンかけるのに手間取ったけど。間に合ってた」

「キット」サラリーマンが泣きながら完全に壊れたカマイタチに駆け寄る。

「終わったな。これで。さあて転送が始まるぜ」
ヒガシカドが言った。

パン。コンボイの残骸の側にヨウジが立っていた。こちらを見る。

「詰めが甘いぜ。まだ星人が生きていた」

「くっそ。結局、お前が最後においしいところ持ってくんだからな」

「おっ転送が始まった」

気が付くと俺はまたあの部屋にいた。

第7話「レスト・タイム」

「結局、残ったのはコレだけか・・・」

ヒガシカドが部屋を見回して言った。

俺、ヒガシカド、ヤハギ、ヨウジ、ハリコさん、サラリーマン、おじいちゃん。

7人。5人が死んだ。という事実を実感が湧かない。

「まあ、これだけ残ればいい方だ。前回なんて全滅だぜ。まあ、メイド星人強かったからな。今回は楽な方だ」

ヨウジがサラリと言う。

「さあて、点数が出るぞ」ヨウジが続けた。

皆。部屋の真ん中の玉 ゴンツ に注目した。

またテレビ画面のようにモニターになって文字が浮かぶ。

「ヨージ YOU、おいしいとこ持っていきすぎだよ。32点
ータル85点 残り15点で100点」

「ふー。ここまで長かったな。ケイちゃん、次のミッションで俺はたぶんおさらばだ」

ヨウジがニヤリと笑った。

「片思い野郎　YOU、なかなかがんばったね。　18点　残り82点で100点」

「おい、これ誰だよ。片思い野郎って」

ヤハギが俺を見ながら言った。文字の横にはメンバーの似顔絵が浮かんでいる。それから察するに「片思い野郎」はやっぱり俺だ。つたく、どんな情報網だ。ハリコさんの方は見れない。

「まあ、まあ。若いつていいねえ。次は俺かな」
ヒガシカドが言った。

「チャラ男1　YOU、まあまあ活躍10点　残り90点で100点」

「なんだよ。チャラ男1って、しかもシロノより点数低いし」

おいおい。ダイレクトに名前出した。それにしてもゴンツよ。俺がつけたあだ名をなんで知ってたんだ。

「チャラ男2　YOU、なかなか活躍11点　残り89点で100点」

「やっぱり2番手かよ」ヤハギがぼやく。

「つつか、なんで、俺より1点高いんだよ」

「バイク攻撃のおかげじゃね？」

サラリーマンは車で突っ込んだおかげが5点、ハリコさんは0点、

おじいちゃんも0点だった。

「さあて。コレで部屋から出られる。お疲れさん」

「おい、ちょ、待てよ！」

ヨウジはサッサと部屋を出た。俺たちも後続く。隣り部屋の前までくると俺は言った。

「あ、あのお疲れ様です。俺んち、実はココなんで・・・」

「マッジで！今度遊びこよ」

「つつか、隣りかよ」

「たまり場にしようか」

「作戦会議にはもってこいの場所かもな」

ヒガシカドとヤハギが好き勝手に言っている。それらを軽く流して部屋に戻ると、俺は布団にもぐった。

「まさにバタンキューだな・・・」

翌朝、といっても3時間ぐらいしか寝てないのだが、ボーっとした頭のまま、学校へ行く準備をして部屋を出て・・・驚いた。イッキに目が覚めた。アパートの前で。ハリコさんが。待っていた。

「お、おはようございます」

「おはよう、まだ昨日の夜のことが信じられなくて・・・」

「そ、そうすよねえ。とりあえず、学校行きますか」

俺は昨日のゴンツで得た知識をハリコさんに話しながら登校した。

「じゃあ、その漫画、ガンツを読めばいいのね？」

「はあ、俺もまだ読んでないんですけど、おそらくそーゆーことっすねえ」

「ねえ、次の日曜、漫画喫茶につきあってくれない？」

「ああ、いいっすよ。ダイジョブです」

俺は内心、飛び上がるくらい嬉しかったが、表に出さず、それでも軽い足取りになっているのを感じながら。定番のコレってデートだよな。と思いながら。学校の門をくぐった。

「じゃあ、ここで」俺は笑顔で言った。

「ねえ、明日も迎えに行つていい？家まで」

「え？」

「なんだか、怖くて・・・」

「はい、大丈夫っすよ！同じ境遇の人がソバにいと心強いっすもんね」

「ありがとう」

ゲタ箱に靴を入れて上履きに履き替えると、クラスメイトのオダ君が話しかけてきた。

「おい、お前」

「な、なんすか」

そう。オダ君とは特別仲がいいわけではないのだ。

「今の、タドコロハリコだろ、ミスフウリングルスの」

「そ、そうだけど」

「なにになに？つきあってたんの？どこでお知り合いになったのよ」

もちろん、後をつけて、車に轢かれそうなところを助けて、いや助けられず轢かれて、隣の部屋に転送されて・・・と説明もできず

に適當にごまかした。

その日、一日比較的、俺は注目されて、ヒガミや嫉妬、羨望いろいろ入り混じった視線を受けた。しかし、ハリコさんと登校できる。という事実を手に入れた俺にはどうでもいいことだった。

「しかも、下校まで一緒なんて」

「どうしたの？」

「いや、なんでもないっす。まさか、ゲタ箱でハリコさんが待つてるなんて思わなくて」

それから一週間が何事もなく無事に過ぎた。もちろん、俺とハリコさんとは何の進展もなく、漫画喫茶でガッツを読んだぐらいだ。

そして、今日も、一緒に帰る。というとき、校門の前に人が立っているが見えた。

「あれ？あの人・・・」

ハリコさんが先に気がついた。この前、あの部屋にいたおじいちゃんだ。

ハリコさんをみつけたおじいちゃんは、まあ、俺の方も軽く見て会釈したが。

まっすぐに歩いてきた。

「君に、いや、やっぱり2人に話があるんだ」

「どうしたの？」

「なんすか？」

「今日の夜、ミッションがあるんだ。そこで、君、タドコロさん。あんたが死ぬ」

何言っ
てんだ、
この人。
もうひとつ、
非日常が迫っ
てきたよう
だ。

第8話「アライブ」

「1日を繰り返した？今日を？」

「そうだ、私は今日、2回目の今日を送っている。確実に今夜この前みたいなの……ミッション。それがある」

おじいちゃんは言った。

ここは俺の部屋だった。ハリコさんもいる。

とにかく話がしたいというので、俺のアパートに来たのだ。

いつか、ハリコさんを部屋に……。なんて思ったのがこんな形で叶うとは……。おじいちゃん付きかよ。まあいい。

「あのさ、こないだあんなことがあったから、もう何聞いても驚かないけどさ、もう少し詳しく話してもらわないと」

「ああ、私にはさっき言ったように死者の助けを聞くと1日を繰り返してしまう能力がある。それで、私は1回ミッションに参加したんだ。今日」

「ちょ、それ、トゥルーコーリングじゃん。待てよ、じいさん、死んだ人の声聞いたってことは……」

「そう、僕は君の声を聞いたんだ、タドコロハリコさん」

おじいちゃんはハリコさんを見て言った。

「え？私・・・」

「マ、マジかよ・・・」

「君は星人に殺される。これだけは言っておこう。あとはなんとかしてくれ」

「ちょ、それ無責任じゃないすか、どういう状況で。とかさあ」

「本来なら」

「本来？」

「そう。本来なら伝えるべきではないことだ。死ぬ運命にあるものを、助けてはいけない。人間は運命に従うべきなんだよ」

「じゃあ、なんで、私に教えてくれたんですか？」

「君のお兄さんだよ」

「え？」

「君のお兄さん、タドコロトオル君と君は私の愛した人の孫でもあった。君のおばあさんタドコロマキさんのね」

「おばあちゃん・・・。2年前になくなったわ。私が高1のときよ」

「お兄さんが助けたよね。1回」

「はい」

「お兄さんも同じ能力を持っていたんだよ」

「まさか」

「そう、お兄さんは1回助けているんだ。君のおばあさんを。だが、私はやはり運命を変えてはいけないと思ったんだ。そのときは・・・」

「あ、あの、ま、まさかその後、お、おばあちゃんを・・・」

話が見えない俺はただ聞くだけだった。ゴンツから読んでいる人は是非「トオル・コーリング」を読んでくれとだけ、読者の皆さんに言うておこう。

ピンポン。

張り詰めた空気を裂くように、間の抜けた音がした。

誰か訪ねてきたのだ。

ガチャガチャとドアノブを揺らす音、ガチャリと鍵が開く。

合鍵を持っていて、今日来るはずの人といえば・・・。

「ケイちゃん。いるの？」

やはりオカんだ。掃除しにくるとか言ってたっけ。

いきなりドアを開けたオカンの目にはまずハリコさんと俺が映った。

「あらあら、お邪魔だったかしら。ケイちゃんったらこんなカワイイ彼女・・・」

ふすまの影に隠れていたおじいさんに気がつき、目がテンになっていた。

無理もない。アパートの6畳の部屋に女子高生、おじいさん、男子高校生の俺。

いったいどんなシチュエーションだよ。

「えつとね。これは・・・」

なんとかごまかそうとする俺・・・。

「わ、私はこれで失礼する・・・」

おじいさんはいきなり立ちあがって、オカンに会釈した。

「え？ちょ、まだ、話終わってない」

「私も帰ります」

ハリコさんも立ち上がる。おいおい。

2人とも母親とすれ違い玄関に向かう。

オカンと俺は2人取り残された。

「えつとね・・・」

ったくなんてごまかせばいいんだよ。

だが、母親は深く追求することもなく、早速掃除の準備にとりかっていた。

助かるぜ、オカン。作者的にも。

部屋の掃除も終わり、オカンの手料理を食い、オカンは帰り、俺は部屋にひとりになった。

「今日、マジでミッションあんのかよ・・・。つうか俺は隣りの部屋に転送されるだけなんだよな」

そんな独り言を布団に寝っころがってつぶやく、ハリコさんにも聞きたいことがたくさんある。

「きたきた！」

背中にゾクゾクした感じ。初めてだか、たぶんこれが予兆だ。

案の定、ゆつくりと転送が始まった。

第9話「ビフォー・ザ・カーム」

「お。きたきた」

「待つてたよお。最後に来るんだもんなあ」

ヒガシカドとヤハギの声だった。

寝そべったまま転送されてきた俺は、ゆっくりと起き上がった。

ハリコさんがこちらを見ていた。目が合う。俺は頷いた。

部屋の反対側では昼間、俺の部屋に来たジイサマが佇んでいた。

彼は本当に今日を繰り返しているのだろうか。

ミナミヨウジは相変わらず、我関せずで、白い球体ゴンツをみつめていた。

あのサラリーマンもいた。近づいてくる。

「見たかい？ニュース。テロ扱いされるけど、結局は僕たちがやったことなんだよね……。会社でも大騒ぎでさ。なんせ、うちの商品も粉々だったから」

「はい、みましたよ」

「また、今日もあんなことが起こるのかい」

「おそらく・・・」

前回のミツシヨンの話だ。あの後ニュースで何度も「メクハリメツセでテロか!？」の見出しを何度も見た。

「とにかく、皆で生き残ろう。この間の件でわかつたろう。皆、とりあえず、スーツは着て銃は持っていつてくれよ」

ヒガシカドが言った。

「おいおい。お前いつから、そんなキャラになつたんだい？」

ヤハギがちゃかす。

「うつせえ。とにかくやることやんなきゃ死ぬつつつことだよ、なあ、ヨウちゃん」

ヒガシカドはヨウジに話かけた。

「ヨウちゃんはやめてくれ。リーダー気取りさん」

「んだと!」

ヒガシカドが、つかみかかろうとしたときだ。ハリコさんが言った。

「ねえ、まだ誰か転送されてきてる」

部屋のすみに足が浮き出てくるのがみえた。スネ、ふとももと順番に姿を現してきたが、明らかに子供だった。

「おいおい、まさか新メンバーって」

すでに、5歳ぐらいの男の子が現れていた。

「あれ、ここどこ、パパは？ママは？」

無邪気な顔で問いかけてきた。

「この子も死んだのか」

ヤハギが言った。

「なあ、ボク、ここに来るまでのこと覚えているかい？」

「んーとね。ボクねひとりでお留守番してたの。パパ、ママ、帰ってくるのが遅いから、ベランダに出てねえ、お外見ようと思ってねー。それからーんーと。んーと」

「転落死か・・・」

ヒガシカドが苦い顔をした。

「なんだよ、ゴンツは新メンバーにこんな役立たず寄越しやがってまだ、あんたの方がマシだったな」

ヨウジが言った。

「ちょっと。そういう言い方はないんじゃない？こないだは協力した中じゃーん」

ヤハギが茶化した感じで絡む。

「わかった。わかった。また協力してくれよ」

ヨウジがゲンナリした感じで答えた。

その瞬間、またあの音楽が流れ始めた。

「よし、ターゲットが出てくるぞ」

皆白い球体に注目する。子供はハリコさんにピッタリ寄り添っていた。子供ながら、一番信頼できると思ったのだらう。正解。

「ちあ、こんかいもいつてきてくだちい

三木星人

くちぐせ：やあ、ボク、三木よろしくね

とくちよう：つおいお。なかみが」

「だつてさ」

ヤハギがつぶやく。画面には恐ろしい顔をしたライオンみたいな猛獣が映し出されていた。

「ほら、シロノ。お前ただぞ、スーツ着てないの」

ヒガシカドが言った。

「え？」

「ほら、転送が始まった」

俺は慌てて球体からスーツケース（片思い野郎と書かれたヤツだ）をとった。

「ヤベ、武器……」

転送は始まっていた。もう景色は変わっていた。

「やっべえ。武器持ってこれなかった……。ここは？」

そばにハリコさんが立っていた。手に銃を持っている。他には誰もいない。

あとは他のところに転送されたのか？

「ねえ、シロノ君。ここ、メイハマだよね」

「そう……。だね。まさか2週連続で同じ県に飛ばされるなんてね」

俺は日本一人気のあるレジャーランド「江戸デスティニーランド」のメインゲートを見つめて言った。

第10話「デス・マーチ」

「やっぱり、この中に星人がいるのかなあ・・・」

僕はハリコさんを見つめていった。

「うん・・・」

なんだか、浮かない顔をしていた。

「あの、やっぱり、昼間のことに気にしてます？」

「あのね。私、あの後、おじいさんからいろいろ聞いたの。で、お兄ちゃんにも」

「で、お兄さんはなんて？」

「やっと伏線回収したか。だけ」

「そ、そうですか」

「とにかく。今はこのミッションを頑張らないと」

「でも、あのじいちゃん今日は、ハリコさんがこのミッションで・・・」

「うん。大丈夫」

俺が守ります。と心の中でつぶやく。

「とりあえず、武器を・・・いや、やっぱりハリコさん持っていてください。使い方がわかりますよね」

「うん」

僕らは「江戸ディステイニerland」のメインゲートへ、向かった。ハリコさんにはここで待っていて欲しかったが、前回のゾンビの件もある。どこが危険な場所かもわからない。

「シロノ君はここ来たことある？」

「え、ええ。小学生の頃かな」

いつか、彼女と。思っていたことは言わない。

しかし、まさかこんな形で女の子と向かうとは。

メインゲートをぐぐりぬける。

「とりあえず、どうします？他のヤツらはどこだろ？あの子供ひとりじゃないだろうなあ」

俺は手元のレーダーをみた。

「あつ。ここ反応してる。どこだ？ここ？」

ハリコさんもレーダーを見ている。

「ここ、風さんのはちみつ屋さんじゃないかな」

「あ、詳しいんですね・・・」

「うん、年1回は行くかな。今度一緒に行く？」

その言葉にドキリとしたが、僕はすぐに思った。

甘い思い出の前に苦い思い出が先にできてしまっんじゃないか。

こじで。

だが、ここはこう答えるべきだ。

「行きましょう。2人で」

個人的には「生きましょう」と掛けているつもりだった。

「ありがとう」

そんな気持ちを察したのか、彼女はそう言った。

「とりあえず、この反応のところ行きますか。でもハリコさんを危険な目に合わせたくないんですよ。だから、しばらくここで様子を・・・」

「私は大丈夫。だから、ここに行きましょう。私は行かないといけないの」

彼女はリーダーの赤い点をみつめていた。

赤い点は動いている。その先には青い点があった。

第11話「トウデイ・イズ・サムデイ」

俺達は「風さんのはちみつ屋さん」というアトラクションの前まで来ていた。

俺が来た小学生の頃にはなかったアトラクションだった。

ハリコさんはどんどん足を進めていく。

まるで、何か目的があるかのように。

「あれ、子供の泣き声？」

俺は気がついた。さっきの子供に違いない。

アトラクションの横のトイレ前にその子供はいた。

「ママー、パパー、どこにいるのー」と泣きじゃくっていた。

俺は子供にかけよった。

「おい、大丈夫か？パパとママに会わせてやっからな」

もし俺が生きていたら。という言葉はもちろん、つけない。

リーダーと見比べてみる。青い点はこの子供だったのだ。

俺はリーダーをみつめた。赤い点が近づいている。それに向かう青い点がひとつ。

「あれ、この二つが俺とあの子供だろ。ってことはハリコさん!？」

「おまえ、ちょっとトイレに隠れてろ」

そう、子供に言っ、俺はリーダーを頼りに走り始めた。

だが、ハリコさんは肉眼ですぐに確認できた。

数十メートルほど先で銃をかまえて何者かと対峙していた。

「あ、あれって。三木さん？」

江戸デステイニールランドのメインキャラクター「三木さん」だ。

やっぱり、あの中身があゴンの画面に映ってた猛獣のヤツなのか？

とにかく、ハリコさんの所へ行かないと。

「ハリコさーん」

「来ないで!」

ハリコさんは叫んでいた。

「な、ど、どうして?」

「わー。三木さんだー」

あの子供が、僕を追い越して、ハリコさんと三木さんの方へ駆けていった。

「ね、おい。つたくよお。トイレで隠れていろって・・・」

無防備に三木さんに近づこうとする子供の前にハリコさんが立ちはだかった。

「危ないわ。近づかないで」

「でもお。三木さんだよ」

「いいから。私の後ろにいて」

ハリコさんは三木さんに銃を向けたまま、言った。

銃を持たせたのは間違いだったのか？

そういえば、三木さんの風貌を描写していなかったな。作者、いや、俺は思った。

まあ、アレだ。もちろんアレを想像してくれ。

「ねえ、ハリコさんとりあえず、そこから離れて・・・おい。えつと。子供。お前もこつち来いよ」

「やだ！おねえちゃんというもん」

つたく。

「ねえ、ハリコさん」

「ねえ。あのお兄ちゃんのところ行って」

「はい」

しづぶ子供が近づいてくる。

三木さんは止まったまま、微動だにしない。

「ねえ、ハリコさん。僕がなんとかするから」

「ダメ」

「へ？」

「あの、おじいさんから聞いたの」

「何を？」

「私、今回のミッションで死ぬの」

「だから、それは・・・」

「私、その子を守るために死ぬんだって」

「えっ？」

「だから、コイツを倒さなきゃ」

「やあ、ボク、三木よろしくね」

三木さんがしゃべった。

そのとき、ゴロンと着ぐるみの頭がとれた。

「やっぱり・・・おい子供ここにいろよ」

ゆつくりとライオンの顔をした星人が出てきた。

着ぐるみが引き裂かれ、よつんばいになる。

顔だけじゃない。

まさにライオンそのものの、猛獣が目の前にいた。

しかも、ライオンよりも大きいキバ、長い爪。

「TVとかでしかあんまり見ないからそう思うだけだろ」

言い聞かせるが、普通のライオンでさえ相手にできるかどうかが問題だ。

例のスーツを着ているが。

普通の高校生が。

「やあ、ボク、三木さん。よろしくね」

ライオンはもう一度言った。

第12話「フリーダム・フリーダム」

俺はライオンに少し近づいた。

「ね。ハリコさん。ココは俺にまかせて。ハリコさんが死なないように俺、がんばるから」

「ダメ。私がコイツを倒す」

「いや、でも」

ギューーン、ギューーンと音がした。

ライオン丸（というあだ名にした）サッと横に飛ぶ。

パンッと音がして、地面に穴があく。

なんと、ハリコさんはしっかりロックオンして攻撃していたのだ。

これなら、イけるかもしれない。

と思った瞬間だった。

ライオン丸はもう俺の目の前にいた。子供が必死にしがみついくる。

ヤベ。これは俺がヤバイ。

考えるまもなく、ライオン丸は急に立ち上がった。

「な、なんだ？」

驚いたことにヘソのあたりから角が出ている。ほんの数センチ。

「な、な」

「危ない」

声が聞こえた瞬間目の前にはハリコさんが立っていた。

俺は小さな痛みを腹に感じた。

なにかがささっている。さっきの角だ。

伸びたのか。

幸い、先端が少し当たっただけだ。

しかし、俺の目の前に立っていたハリコさんは……

ウソだ。

角はしっかりハリコさんの体をつらぬいていた。

「ハ、ハリコさん……」

バチバチつと音がして、ハリコさんの前に人影が現れた。

と、同時にその角は縮み始めていた。

「じ、じいさん・・・」

その人影はあのシイサマだった。

ジイサマ、ハリコさんをあの角は貫いていたのだ。

「ま、守れなかったのか・・・でも、これでいいはずだ。すまない。私はここまでだ」

ジイサマと、ハリコさんが倒れこむ。

子供は後ろでまだ俺にしがみついている。怖いのだろう。震えている。

「クッソ」俺はライオン丸を睨みつけた。

2人にかけてよかったが、コイツを倒さねば。

と、思った瞬間、ライオン丸の頭は吹っ飛んだ。

ヤツは倒れた。

「おーい」

ヒガシカドとヤハギとヨウジが駆けつけてくる。

「遅かったか」

ヒガシカドが声をかけてきたが、俺は呆然としていた。

安堵感と悲壮感が交ざりあってわけがわからない。

「なんとか攻撃できたけど・・・2人は？」

「ダメだこのジイさんは死んでる」

ヨウジが言う。

「ハリコちゃん意識がある！生きてるぞ！」

座ってハリコさんを抱きかかえていたヤハギが叫んだ。

3人が取り囲んだ。

俺はまだ動けない。

「ジイさんのおかげで急所から外れたみたいだ。ただ出血がひどい」

ヒガシカドがスーツの上半身だけ脱いで、さらにその下に着ていたTシャツを脱ぐ。

「これで、傷口押さえて。反対側も塞いだほうがいい」

「まだ、間に合うかもしれない。早くミッションをクリアすれば・・・」

「って、このライオン野郎を倒しただろ」

「まだ転送が始まってない。まだ、ラスボスがいるはずだ」

「クソ、どこだ。レーダーは？」

「えっと。ここだ。ここどこだよ。場内の真ん中」

「あんみつ姫の城か・・・」

「おい、青い点もある」

「ここにいないのは・・・あのリーマンだな・・・」

「とにかく向かおう」

「おい、ケイちゃんはここにいて、ハリコさんを見てろ子供もいるし」

俺はようやく、我に返った。

「いや、俺も行く。ハリコさんを助けるなら人数が多い方がいいんだろ」

「ダメだ。お前は彼女のソバにいろ！ほら、しっかり傷口を塞いで！」

俺は言われるまま、しゃがみこんで、ハリコさんを抱きかかえた。

3人は走り出していた。

それから数十分後、転送が始まった。

第13話「アリバイ・ララバイ」

江戸デイスティニーランドのミッションから早くも1ヶ月が過ぎようとしていた。

あの部屋に転送されたとき、生き残っていたのはヒガシカド、ヤハギ、ヨウちゃん、ハリコさん、がきんちょ、俺だった。

つまり、ジイサマと、リーマンが犠牲になったわけだ。

ヨウちゃんは100点をとうとう獲得。自由を選ぶ。記憶を消され、おそらく平穏無事に暮らしているはずだ。

僕と言えば、相変わらず、グータラに生きている。

ハリコさんと登下校は一緒なもの、なんの進展もなし。

しかし、あれからミッションは一度も起きていない。

ヒガシカドとヤハギとはたまにメールで連絡を取り合うぐらいだ。

このまま、ただ時が流れていくだけではないのだろうか。なににも起こらずに。

そんな事を思っていた。

だが、現実はその甘くはなかった。

今は授業中で、俺はおもしろくもない授業を受けていた。

ガラガラ。

突然、教室の扉が開く。

「誰だ。君は？ウチの生徒じゃないな」

教室中の注目を集めたヤツはまっすぐ、こちらに向かってきていた。

「よ、ヨウちゃん・・・どうしてここに？」

そう、南洋司だったのだ。

「来てくれ、ケイちゃん」

「ちょ、ちょっと待ってくれよ。何？突然来てさあ」

「記憶が戻った。急に。クソ、こんなことなら、強い武器を選ぶべきだったな」

「へ？」

「始まる」

「何が？」

「セカンド・インパクト」

ガタン、イスが倒れるぐらい俺は思い切り立ち上がる。

「ど、どうしたシロノ、知り合いか？」

先生が声をかける。

「あ、ええ。まあ」

何かしら言い訳を考えていると、窓際の生徒がつぶやいた。

「なんだ、あれ、ほら、校庭にさ、人がわんさか・・・」

「うわ、なんかゾンビみてえ」

「なんかの撮影？」

「まさか・・・」

「な、始まつたろ。これが、セカンド・インパクト。最終ミッシェン。ゾンビ星人さ」

「スーツは？武器は？」

「もちろん装備してる。ケイちゃんもだろ」

「ま、まあね」

俺はカバンから銃を取り出した。

「み、みんな、学校から離れた方がいい。えっと、避難。そう避難してくれ！！」

俺は叫んだ。

「はあ？何言ってるの」

「何、その銃」

いろんな声が飛び交う。

「いーから、静かに、ちょっと先生、様子見てくるから」
先生が、教室を出て行く。

「おい、どうする？」

「ケイちゃん、避難とかしたところで無理だぜ。おそらく日本中が、いや、世界中がこんな感じかも」

「じゃあ、どうすんだ？」

「とにかく闘おう」

「ハリコさん！！ハリコさんところに行かなきゃ。みんなにも連絡しないと」

俺とヨウジは廊下に出た。

廊下も、生徒たちで溢れかえっていた。

「みんな！！家に帰ったほうが・・・いい。ゾンビ・・・が・・・」

「ケイちゃん。無駄だ。ハリコさんそこ急ごう」

「あ、ああ」

俺とヨウジは走り出していた・・・。

あ、あれ、ハリコさん・・ねん・・何組だっけ・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2224d/>

GONTZ -ゴンツ-

2010年10月14日19時11分発行